
Fate/NextWar

星史郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / N e x t W a r

【Nコード】

N 7 9 7 1 D

【作者名】

星史郎

【あらすじ】

正義の味方を目指す衛宮士郎が新たな仲間を召喚し、願いがかなうと言われる宝物、聖杯を奪いあう聖杯戦争をやめさせるため、聖杯の完全な破壊を目指す。

プロローグ（前書き）

F a t e / s t a y n i g h t とホロウの二次創作。ネタバレ有り。ホロウの後の話でイリヤ、慎二死亡。セイバーは元の世界に帰還。新キャラクターを出します。嫌な人は読まない方が良い。適当にやっています。

プロローグ

聖杯戦争から二年が過ぎた。聖杯戦争は冬木市に大きな傷痕を残した。

特に慎二のことは身近な者のことで俺達の心に大きな傷を残した。しかし時の流れはそうした傷口を埋めていき、新たな出会いをもたらした。死んだ神父の代わりに神父に似た俺をいじめることを趣味にしているとしか思えないシスターが現れ、俺の屋敷には瀕死から助けた不器用な用心棒が押し掛けてきた。最初は兄を亡くし、沈みがちな桜も新たな住民に対抗するたび元気を取り戻していった。

そんな平和が戻ってきたころ異変が起こった。

ここ二三日ほど前から大気に魔力が溢れ、違和感を感じる。

遠坂にこの違和感を話してみたが、

「衛宮くん。私達聖杯を破壊したわよね？無いものは出来ないのよ。いくら素人でも分かるわよね？多分聖杯を破壊した反動ね。」

と若干刺のある返事が返ってきたので、早々とこの話題を打ち切った。どうやら聖杯の破壊について協会からいろいろ言われているらしく、俺のことを隠すため、責任を全て被り責められてストレスが溜まっているらしい。こういう時は触らぬ赤い悪魔に祟り無しだ。

今日は静かな夜だった。新たに住み着いた住人は、用事があるらしく、出掛けているからだ。どうも今の冬木の異変が気になるらしく、辺りを探索しているようだ。遠坂の説明に納得していないらしい。

俺は変な空気の中どうしても眠れず、

縁側で風に当たりながら月見をしていた。

急に手に痛みを感じた。何か踏みつけて、手を切ったかと思ったら、昔形こそ違っが見慣れた聖痕が手に表れていた。遠坂のうっかり癖

を忘れてのんびりしていた俺は馬鹿に思える。また聖杯戦争が始まるのだ。俺は土蔵に向かう。令呪が現れた以上不参加はあり得ない。現れなくとも参加しないわけにもいかない。俺の正義のためにも争いを止めなければいけない。その為には力が必要だ。サーバントと
言う名の力が。

召喚開始

まず召喚のために土蔵に向かう。

同居人がいない今、俺の状況は非常に危険だ。

なぜなら俺の養父は魔術師殺しとして有名な上、怨みを片っ端から買いまくり、前々回の聖杯戦争で最後まで残った人だ。

俺自身も前回の聖杯戦争での勝利者ということは、遠坂のおかげでバレていないはずだが、遠坂には伝家の宝刀のうっかりでバレている可能性も十分あるし、そうでなくとも、かわりに勝利者ということになっている遠坂のパートナーの扱いで、少なくとも聖杯戦争の経験者ということだ。異様に致死率の高いこの戦争は、生き残るだけでも充分驚異的な存在なので注目の的だ。いくらへっぴょ魔術師に見えても、実際そうなのだが、畏だと思われるのがオチだ。

普段は冬木のオーナーである遠坂の力で、ややこしい接触は無いが、今は戦争中だ。多少事情を知った普通のマスターならサーバントを偵察にくらい寄越すだろう。サーバントが警戒能力しか無い工房に偵察きた時、マスターである俺がいたらどうなるか、前回の経験で十分思いしつた。

戦うのは論外だし、同居人が来るまで隠れるというのも、まともな魔術が使えない俺には無理だ。キャスターの時のようにいぶりだすのに、人質を取られる可能性すらある。そもそも俺の魔術は人に見せない方が良らしく、自分では大したものではないと思うのだが、見つければ協会に封印指定されて、あまり愉快なことにならないらしい。これは封印指定を狩っていた同居人も同じ事を言っていたので本当なのだろう。

だから俺はサーバントを召喚できる魔方陣のある土蔵へ向かって

いる。触媒が無いので最悪何故か俺を敵視してる赤い弓兵が出てくるがなけなしの運に頼るしかない。

どうしても意見が合わない場合、最終手段として令呪を使う。

ただひとつ前回セイバーを呼び出した、ある英雄に縁の深い聖遺物を持つてる。しかし体の中にある鞘はもはや媒体になりえない。もう彼女は召喚されることは無いのだから。

土蔵に入ると床に手をつき魔方阵に魔力を注ぐ。本来なら呪文の一つでも唱えるべきなのかも知れないが、あいにく俺はそんな気のきいたものは知らない。俺は少しでも似た存在が来るように、もうもどらない最強の剣を思い浮かべる。ただひたすら魔力を流し、彼女を思い浮かべる。

「共に戦う英雄よきたれ。」

心に思い浮かんだ言葉が自然と口に出る。それをきっかけにイメージが固まる。身体中から魔力が絞り取られるように、床の魔方阵に流れ落ち、魔方阵より魔力が溢れた。

身体中から血を抜き取られ、貧血を起こしたように意識が遠退く。俺は気力を振り絞り耐えようとしたが、思わずしりもちをついた。光の中に人影が浮かび、こちらに手を差し出す。偶然にも前と同じ状況。思わず俺は叫んでいた。

「セイバー……！」

召喚成功

「期待させて申し訳ない。私ライダーです。」

俺の叫びはそんな困ったような気まずい返事によって否定された。魂のこもった叫びの後のせいかなんとも言えない空気が流れる。

魔方阵からの光が薄れ、ライダーの姿がよく見えるようになる。金髪碧眼で全体的に金色の細工が目立つ、ワルキューレみたいな格好をした少女だった。セイバーに似ているのは身長だけで、雰囲気から口調まで重なり合う所はまるで無い。

呆然と座り込んでいると彼女が話しかけてきた。

「あの、シヨツクのはわかりますが、いつまでも地べたにへたり込んでも、仕方ありません。とりあえず起き上がって、安全な所で今後の話でもしませんか？」

確かにこちらの都合で召喚して、こんな所にほったらかしでは失礼だろう。

「ああすまない。こっちの茶の間で話そう。お茶を出すよ。」

「いえ、それよりここから離れませんか？だって、ここで召喚されたの丸わかりですよ？マスターの正体バレますよ。」

「ああ。俺は結構有名らしくて、どちらにしろ、すぐバレるよ。」

「じゃあ、せめて工房へ行きましょう。腕に自信があるのかも知れませんが、召喚で魔力を消耗した状態では、サポートどころか逃走

もままなりません。」

「へたれ魔術使いですいません。ここが工房です。」

急にライダーの顔が険しくなる。やはり俺の魔術のあまりのお粗末さにあきれているのだろうか。

「では安全な所と言いたい所ですが、魔力だだ漏れの化け物みたいな存在がすごい速さで接近して来てます。ここに隠れていてください。」

どうやら敵の襲撃のようだ。やはり見張られていたか。屋敷の警報が鳴っていないのでまだ屋敷には入られていないようだ。

「サーヴァントなのか？」

「いえ違います。たぶん人間なんだと思いますが、人間の放出する魔力とは思えません。まるでサーヴァントみたいです。キヤスターが強化しているのかもしれませんが。外で迎え撃ちます。」

「俺も行く。」

そう言つて立ち上がろうとするが、急に立ち上がったせいかめまいがしてふらつく。

「バカですか？」

「確かにサーヴァントなら俺は力不足かもしれないが、相手が人間なら何か手伝えるかもしれない。それでも前回の聖杯戦争経験者だ。」

ライダーを見ると困ったような苦笑いをしている。

「それ以前に魔力が無い上、倒れそうですよ。そもそも動けすか？」

「う、それは……。でも女の子一人に戦わせる訳には……。」

「もう仕方ないですね。」

ライダーが突然俺を抱きしめた。顔が胸に埋もれいい匂いがする。手が首に回された。ときどきしながら何か言おうとした時

「自己紹介はまた後で。」

突然俺の意識は途絶えた。

襲撃者？

俺が目覚めた時、土蔵の中に布団がしかれており、その布団で俺は眠っていたようだ。

そして俺は昨日のことを思い出した。

「ライダー生きているか？返事をしてくれ。」

最初からここにいたのか、俺の声を受け虚空からライダーが姿をあらわす。

「はい。マスター。生きてますよ。それより、昨日この屋敷に突撃してきた、自称お客様を名乗る、猪みたいなやつが居座ってます。殺していいですか？」

顔色も口調や声音も変わっていないが、非常に不機嫌そうな気がする。というか殺すとか物騒な言葉まで混じっている。何はともあれ落ち着いて貰わないと。

「いや殺すって物騒な。どんな奴なんだ？名前とか名乗らなかったか？」

「アルトリアと言えば分かると。」

一瞬間き間違いではないかと思った。思わず怒鳴り付けてしまう。

「なに！！彼女は消えたはずだ。」

自分の言ったことながらライダーには意味がわからないだろう。ただの八つ当たり。自分に対する事実の呼び掛け。

「なら偽物ですね。速やかに消して来ます。」

ライダーは気を悪くすることなく、むしろ心持ち弾んだ声で答える。

「だから待て。どうしてそんなに物騒な考え方しかできないんだ。とりあえず会おう。確かめなければ。」

そうだ確めなければならない。偽物なのか、本物なのか。もし本物なら何故この時代に戻って来たのか。昔のような願いが蘇っているなら、また引き戻さなければならない。

「危険です。サーヴァント並みの化け物ですよ。」

しかもお腹を鳴らしながら食べ物を超えせと餓狼のようになっています。出たら食べられるかもしれません。」

気が抜ける。そんなことをするのはセイバー以外にそうはいないだろう。どうやってこの時代に来たのか。そもそも死んだのではないのかなど謎は残るが、罠などの危険はぐっと減った。

「で食べ物が出したのか？」

「はい、勝手に冷蔵庫を荒らそうとしたので止めておきました。ぶぶ漬けを出したのですが図々しくおかわりまで要求して居座ってます。」

やはりライダーはセイバーを追い出したいようだ。

「とりあえず、会わなければ始まらない。会いに行こう。」

ライダーに連れられて向かった先には懐かしい姿があった。昔の短いなながら楽しかった時が思いつかぶ。

「シロウー!!」

「セイバー!!」

彼女もこちらに気がつき、顔を輝かせて両手を広げ、抱きつこうとこちらに駆け寄ってくる。俺も両手を広げ、待ち構える。

そして彼女は突然視界から消えた。遅れて横の方から轟音が鳴り響き、バウンドして草むらに突き刺さるセイバーが見えた。

「貴様。何をする。」

「猪は黙ってください。そんなゴリラみたいな力で抱きついたらマスターの背骨が折れます。というかアルトリアという方は消えたのでしょうか?ということはあなたは偽物です。さっさと元いた所に帰りなさい。」

「貴様言わせておけば。」

どこが合わないのか二人の相性は最悪らしい。両者の殺気で世界が重くなる。空気が液体のように粘りけを帯びたように感じ、今にも殺し合いが始まりそうだ。間に入るのは自殺行為かもしれないがこのままにして置く訳にも行かない。

「ま、まあ、今は非常時だし、もう少し意見交換でもして落ち着きませんか?」

猛獣の争いのような場面に飛び込み、思わず口調が変わってしまう。実際二人の戦闘能力は猛獣以上。笑い事ではない。

「まあ、マスターがそう言うのであれば。」

「はい。シロウがそういうなら。」

さいわい二人は戦闘体制をとき、非常に険悪な空気ながら、居間に戻って行く。そしてまずセイバーが口を開いた。

「まず私の事情から話しましょう。確かに現在の私の状況は非常に怪しい。疑われるのも無理はありません。」

そしてセイバーはここに来るまでの話を始めた。

王の休息（前書き）

独自設定大量に入ります。嫌な方は見ないことをお勧めします。

王の休息

まず、初めて会う者もいるので名乗りますが私の名はアルトリア・ペンドラゴン、察しているかもしれませんが有名な方の名はアーサー・ペンドラゴン。円卓の騎士を率いていました。知ってますよね？いえ、馬鹿にしている訳ではないのですが、魔術をほとんど使えない魔術師などとき例外があるので、一応確認をしたまでです。

私の最後は伝説から分かりますよね？私は聖杯を求めたのですが、手にいれることが出来ず、願いを叶えたことがありません。そのせいか死の寸前に聖杯を求め、肉体を持ったまま、英霊になるというイレギュラーが起きました。

そして、シロウに出会い、願いをあきらめ聖杯を求めなくなり英霊ではなくなったのです。

そして聖剣の返還を願い後は死を待つのみでした。

実はここからは私の意識が無いことが多く、周りから話をきいて、回想にしたものなのですがだいたいあっているはずです。

「シロウ。もう一度会いたい。」

死を前に私はそう思いました。

しかし死の直前にマーリンが現れました。

「すまん主よ、間に合わなかった。主よ生きたいか？モードレッドの呪いは強力じゃ。おそらく鞘を無くした主では、生き残ることは不可能。じゃが妖精郷で処置すれば、延命くらいならできるかもしれない。行くか？」

私はその言葉にうなづき、妖精郷に連れて行かれました。

「な、なんとこれは……」

呪いが呪いを浸食していく。

ほんの点でしかない、しかし、黒よりなお暗い闇色が白い紙落としたインクのように、染み渡るように黒をなお暗い闇に染めていく。モードレッドの呪いは弱いものではない。むしろ稀代の魔術師と言われたマーリンですら、解呪が出来ないほど強力なものだ。しかしこの世界中の呪いを集めたような闇色の呪いの前には憎悪に染まった黒もまるでくすんだ灰色のように見え、闇に染まることに抵抗できていない。

「なんなのじゃ、これは。いつの間にこんなものが……」

この呪いがモードレッドの呪いを食らいつくしたときどうなるか想像出来ない。

とても手におえるモノではないがまさか放って置くわけにもいかない。

とりあえず調べるために魔術をつむぐ。呪いの逆流を防ぐため使い魔を通して解析を始める。こうすればもしも、呪いがこちらにきても先に使い魔が死ぬことによりラインが断ち切られ術者の死ぬ確率が減る、ブレイカーの役割をしてくれる。

黒い呪いにはモードレッドの憎悪を感じる。

ひたすら殺意を塗り込めた調べるだけで気が狂いそうな呪い。

さらに、これを解こうするものに死を与える呪い。ペンドラゴンを思うものすべてすら殺そうとする想い。

おもわず吐きそうになる。とても今にも消えゆく呪いとは思えない。確実に王を殺すために呪いの解呪するものすら殺そうとする呪い。

もしかして闇色の呪いはこの呪いが凝縮したものかもしれない。覚悟を決め、闇色の呪いに触れた。

地獄を見た。

死すら救いに見える地獄。

知るだけで精神が壊れる。

これは駄目だ。

見ては駄目だ。

聞いては駄目だ。

知っては駄目だ。

覚えては駄目だ。

恥も外聞もなく、胃の中のものを吐き出し、胃が空っぽになっても吐き続けた。大声で許しを叫び続ける。顔は涙や鼻水に混ざって血の涙と鼻血でグシャグシャになり、ありとあらゆる穴から体液を垂れ流す。驚いて手を差し伸べに来た妖精を振り払い、幼いだった子のように暴れまわる。すべてが落ち着いた時、マールンは見た事は頭に残っていなかった。

「やれやれ、使い魔を通してもこれが。寿命が縮んだわ。しかしこれは……」

この呪いは人間がかけたものではない。

この呪い自身には、解呪の対策すらない。

ただ隠してあったモノの表面を見ただけでこれだ。

人間が知るだけで死にかなない歴史。

正に憎悪や死を集めた負が積み重なった神秘。

おそらく神に近いものの記憶なのだろう。

あまりまっとうな神とは思えないが。

呪いの作り自体は単純そうだが、強度と魔力が桁違い。

モードレッドの呪いが幾千に割れたガラスを組み合わせるような複雑さだが、この呪いは構造を隠そうとしてもしていない。ただ形がわかってても頑丈過ぎて壊せない。魔力を断とうとも、こちらの全魔力を注ごうとも海に一滴のインクを落として、色を染めるような魔力差がある。明らかにモードレッドの呪いとは別。

「しかしもしそうならこんな呪い、何処で誰から……」

少なくとも人間にはどうしようも無い。

力の差もあるが、それより性質の差が大きい。何せ妨害されている訳ではないのに調べることにすら叶わない。使い魔が死ななかったところを見ると、おそらく人間かその血を引くものでないかぎり、害が低い可能性が高い。おそらく魔性のモノなら解析できるかもしれない。気がすまないが頭を下げて妖精達に頼むしかない。

「唯一の救いは主の即座の殺害が目的ではないことだが……」

もし即座に殺害が目的なら小細工をせずただ魔力をぶつければよい。魔力の量だけでも百回は死ぬし、質だけでも、あのいまわしい記憶だけでも凄まじい苦痛と共に生き絶える。苦しませて殺すためののか、他に目的があるのか悔しいが自分の力では全く解らない。

「何ですかこれは？」

いつの間にか後ろに妖精の女王モルガンが立っていた。非常に意外だった。この女は我が主のことをエクスカリバーに相応しくないと、幾度も命を狙って来た。エクスカリバーを返した今、我が主に興味などないと思っていたが……。しかしこれは好都合だ。頼めば我が主を調べ、助けてくれるかもしれない。ワシが口を開こうとする……。

「どきなさい。その者に興味がわきました。」

頼むまでもなく興味深々らしい。しかし、妖精郷に害なすモノとして放り出されかねない。

「黙って見ていなさい。調べない訳にもいかないでしょう。それともこのまま放って置く気ですか？それとも、そのまま放り出されたいのですか？」

行動を起こす前に釘を刺された

彼女は直接呪いに接触する。まず黒い呪いに触れ顔をしかめ、多少苦労しながら魔力のラインをつなぎ、多少疲労しながら解析を終える。次に闇色の呪いに触れる。そしてあっさりと魔力のラインをつなぎ、さっさと切ってしまう。そして何か考えているようだった。

「マーリン。このモードレッドでない方の呪いはいつ感染したのですか。」

「わからぬ。ワシが駆けつけた時にはもう感染していた。ワシが監禁される前には感染されていなかったはずじゃ。」

「あなたが隠していた訳ではないのですね？」

「うむ。そんなことはしておらん。それよりその呪いはいったい？主は大丈夫なのか？」

「では要点だけ述べましょう。あなたの主は多分あなたの思う意味では大丈夫です。そしてこの呪いは単純に生命維持の効果があるだ

けです。生命維持に邪魔なものを食らいつくし、死にそうなれば、強制的に外部から力を摂取します。」

「なんと、それでは祝福のようではないか。では主は生き延びられるのだな？」

「生存という点では保証します。」

「なにか含みのある言い方じゃな。それにあの祝福をかけたモノは、まっとうなモノとは思えん。全部言え。ワシとお主のなかじやろう。」

「あまり良い仲ではなかった気がします、良いでしょう。話します。」

この呪いをかけた主は、基本的に虚無、空っぽです。特に憎悪も好意もありません。ただ空っぽゆえに誕生のさい受けた感情や記憶を鏡のように映しています。おそらくこれは人間の悪の神です。」

「それは邪神ではないのか？」

「一般的な邪神ではありませんがそうともいえます。ただ神からは動くことはなく、ただ人の意志を受けて動きます。物事を曲解して叶えようとしません。ただ、誕生のさいに受けた憎悪、正確には人間にとっての悪の概念はそこにあるだけで、力を使った者を侵食し殺すでしょう。本人は何も考えていないようですが。」

「では主も死ぬのではないのか？」

「いえ死なないでしょう。この神はあくまで人間の悪の神であって、この世のすべての悪ではありません。よって人間以外にはほとんど

影響をあたえられません。そしてこの呪いは生命維持。おそらく彼女の生命維持の邪魔となる人間の部分を食らいつくし、代わりに自らの呪いで代わりを作るのでしょうか。モードレッドも一応人間ですので、その呪いも食い尽くされます。

魂なども多少汚染されるでしょうが、完全に人間ではなくなるでしょうがこの呪いは人間の部分を模造しようとしているので、だいたいはそのままです。ただ人間の属性の代わりに闇の属性が入ることです。弱ったり、精神が過剰に昂れば魔力の質や性格に変化が起るかもしれません。また生命の危機に陥ると呪いが生命維持を続けるため本人を乗っ取り補給をするかもしれません。」

「補給とは？」

「他者を傷つけ魔力を奪ったり、最悪人を魂ごと喰らったりします。」

「このままにしておく訳にもいかんか。何かこの呪いを取り除いて主をもとの人間に治療する方法はないか？」

「なぜ治療しなければならないのです？」

「何じゃと？」

「火竜の力と魔性の力を持ち、死にくい。エクスカリバーを聖魔とも十分に使いこなす。剣の主に対応しいとは思いませんか？」

「おぬし主を嫌っておらなんだか？」

「ええ。人形にこの剣を渡すなんていやにきまっています。しかも最後は死にたがってた。でも今は違うようですね。だいぶ、感情が戻

っているし、死ぬ気はないようです。剣の番人としても彼女に剣を持たせない理由はありません。最初剣が彼女を選んだことは間違いだと思いましたが、最後の最後で変わりましたね。」

「感情が戻った？」

すこし驚いた。やはりあの過酷な戦いは主に大きな影響を与えたようだ。

「はい。楽しい夢を見ているようです。心が揺り動うごいています。王国が滅びたからでしょうか？まあどちらにせよ呪いを解く気はありません。そもそも解けそうもありませんがね。」

楽しい夢と言うところに多少違和感を感じるが、それは良いことだ。そして思い付いた現在唯一の打開策を投げ掛ける。

「おぬし主を剣の所有者と認めたな。では鞘を返してもらおうか？」

いつものすまし顔が一瞬歪む。痛いところをついたようだ。

「なるほど。鞘の力で呪いを弾き飛ばす気ですか。しかし残念ながら返せません。いえ返せないと言った方が正しい。実は見失いました。」

一瞬何を言っているかわからなかった。言い訳にはお粗末すぎる。そして彼女はあの剣に対して異様な執着があり、それを使命だと思っているふしがある。口が割けてもなくしたなど言うことはないとおもっていたが……

「あなたの主の手から離れた時、私たちも回収しようとしたのです

が見つからなかったのです。おそらく防御機構が働いて存在が感じ取れないのだと思いますが、問題はなぜこちらに還ろうとしないかです。何か危機が訪れたのか、それとも何かを待っているのか。おそらくあなたにも見つけれないと思います。」

嘘では無さそうだ。鞘の防御能力が仇となったのか。宝具は運命が持ち主に導くという。いずれ主の元に還ると思うが今使えなければ意味がない。

「では全てが終わり、主が目覚めるのを待つ他はないか。」

「残念ながらそうなります。彼女に剣を渡すことが私の使命になりましたから、ここには護衛をつけましょう。マーリンあなたは好きなので旅に出てかまいませんよ。彼女が起きたら呼んであげます。」

「ふむ。ではそうさせて貰うか。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7971d/>

Fate/NextWar

2010年10月11日11時48分発行